

「ガリラヤ湖畔での群衆の癒し」

§ 052 マコ 3 : 7~12、マタ 12 : 15~21

1. はじめに

(1) 安息日論争の結果、パリサイ人たちはイエスに対して殺意を抱くようになった。

- ①さて、メシアであり王であるイエスは、どう応答するか。
- ②弟子たちは、攻撃的なメシア像を持っていた。
- ③群衆は、ローマの圧政からイスラエルを解放してくれるメシアを期待していた。

(2) イエスは、予想外の行動に出る。

- ①人の道と神の道とは、遠く離れている。
- ②このことを知れば、今日の箇所の意味が理解できる。

(3) 常識を疑うこと、逆転の発想

- ①世界観を決するような重要なテーマで、科学的に証明されているものはない。
- ②神の存在を証明できないが、神が存在しないことも証明できない。
- ③宇宙の始まり、進化論と創造論など。

(例話) 創造論にとまどう生物学の教授

(4) A. T. ロバートソンの調和表

(§ 52) ガリラヤ湖畔での群衆の癒し

マコ 3 : 7~12、マタ 12 : 15~21

2. アウトライン

- (1) 群衆を癒すイエス
- (2) 汚れた霊を黙らせるイエス
- (3) メシア預言を成就するイエス

3. メッセージのゴール：逆転の発想

- (1) 理性中心から超理性へ
- (2) 広い道から狭い道へ
- (3) 成功哲学から奉仕哲学へ

このメッセージは、人生における逆転の発想について考えようとするものである。

## I. 群衆を癒すイエス (マコ 3 : 7~10)

### 1. 7節 a

「それから、イエスは弟子たちとともに湖のほうに退かれた」

- (1) イエスは、ガリラヤ湖畔に退かれた。
- ①イエスは、パリサイ人たちの殺意を知っておられた。
  - ②まだ十字架の時は来ていない。
  - ③教えるという奉仕が残っている。
  - ④見通しの良い湖畔は、安全である。
- (2) イエスは、たびたび敵を避けて退いておられる。
- ①祈りのために
  - ②休息のために
  - ③弟子たちと時を過ごすために
  - ④多くの場合、群衆がその後を追った。

### 2. 7節 b~8節

「すると、ガリラヤから出て来た大ぜいの人々がついて行った。また、ユダヤから、エルサレムから、イドマヤから、ヨルダンの川向こうやツロ、シドンあたりから、大ぜいの人々が、イエスの行っておられることを聞いて、みもとにやって来た」

- (1) 広い範囲の場所から、群衆が集まって来た。
- ①ガリラヤは地元である。
  - ②ユダヤ、エルサレムは南である。
  - ③イドマヤは、死海の南東で、かつてエドムと言われた地である。
    - \*ヘロデの出身地。聖書ではここにしか出てこない言葉である。
    - \*当時は、イスラエルの領域の一部となっていた。
    - \*そこからは、異邦人も来たであろう。
  - ④ヨルダンの川向うは、東の地である。
    - \*当時は、ペレアと呼ばれた。
    - \*また、デカポリスも含まれる。
    - \*基本的には、異邦人の地である。
  - ⑤ツロとシドンは、北の地である。
    - \*現在のレバノンに当たる。
    - \*ここもまた、異邦人の地である。

- (2) 動機は、イエスが奇跡を行っているという噂を聞いたから。

- ①伝統的に、しるしを行う預言者は、多くの人を集めた。
  - \*エルサレムの城壁を崩すと預言した預言者がいたが、失敗した。
  - \*ヨルダン川の水を分けると預言した預言者もいたが、やはり失敗した。
- ②エリヤとエリシャ以来、イエスのような預言者は出なかった。

### 3. 9～10節

「イエスは、大ぜいの人なので、押し寄せて来ないように、ご自分のために小舟を用意しておくように弟子たちに言いつけられた。それは、多くの人をいやされたので、病気に悩む人たちがみな、イエスにさわろうとして、みもとに押しかけて来たからである」

(1) 病気に悩む人たちはみな、イエスに触ろうとして押しかけて来た。

- ①彼らは、痛みの中を、長距離移動してきた人々である。
  - ②仕事を休んで来た人も多かったであろう。
- (例話) ガリラヤボートの発掘現場に野次馬が群がった。

(2) イエスは、危険な状態になった。

- ①敵対的な群衆ではないが、熱心さの余り、イエスに迫ってくる。
- ②人々は、イエスに触れば癒されると考えた。
- ③イエスにとっては、ストレスの多い場面である。

(3) そこでイエスは、小舟を用意するように弟子たちに命じた。

- ①岸边に小舟を用意し、イエスの移動に合わせて移動させる。
  - ②目撃者情報の生々しさが感じられる。
- \*マルコはペテロから聞いたと思われる。

(4) イエスは、彼らをみな癒された (マタ 12 : 15)。

## II. 汚れた霊を黙らせるイエス (マコ 3 : 11～12)

### 1. 11節

「また、汚れた霊どもが、イエスを見ると、みもとにひれ伏し、『あなたこそ神の子です』と叫ぶのであった」

- (1) 群衆の中に、悪霊につかれた人たちがいた。
  - ①ひれ伏しているのは人間であるが、そうさせているのは悪霊である。
- (2) 悪霊たちは、「あなたこそ神の子です」と叫んだ。

- ①カペナウムの会堂でも同じことが起こっていた。
- ②彼らは、イエスが「神の子」であることを知っていた。
  - \*イエスの神性を認めていた。
- ③彼らは、叫び続けた。

## 2. 12節

### 「イエスは、ご自身のことを知らせないようにと、きびしく彼らを戒められた」

- (1) イエスは、悪霊の証言を認めないし、必要ともしない。
  - ①本来、彼らは嘘つきである。
  - ②彼らは知っているだけで、イエスに従おうとはしていない。
  - ③彼らの叫びは、イエスの奉仕の邪魔になる。
- (2) イエスは、癒された人たちにも、黙っているように命じた(マタ12:16)。
  - ①民衆のメシア像と、イエスが成就しようとしていることとは異なる。
- (3) 父なる神の計画に従って、正しいメシア像を示すことが、イエスの使命である。

## Ⅲ. メシア預言を成就するイエス(マタ12:17~21)

### 1. 17節

#### 「これは、預言者イザヤを通して言われた事が成就するためであった」

- (1) マタイは、ここでのイエスの行動は、メシア預言の成就であると言う。
  - ①マタイの福音書の読者は、ユダヤ人である。
  - ②引用は、イザ42:1~4である。
  - ③イザ42の一部を引用するだけで、ユダヤ人たちには文脈が分かった。

### 2. 18~21節

「これぞ、わたしの選んだわたしのしもべ、わたしの心の喜ぶわたしの愛する者。わたしは彼の上にわたしの霊を置き、彼は異邦人に公義を宣べる。争うこともなく、叫ぶこともせず、大路でその声を聞く者もない。彼はいたんだ葦を折ることもなく、くすぶる燈心を消すこともない、公義を勝利に導くまでは。異邦人は彼の名に望みをかける」

- (1) イエスが湖畔に退いたのは、イザヤ書が預言するメシア像に合致する。
  - ①「争うこともなく、叫ぶこともせず、大路でその声を聞く者もない」(19節)
  - ②イエスは、宣伝や大イベントを必要としないメシアである。

- (2) イエスは、イザヤ書が預言する憐み深いメシアである。
- ①「彼はいたんだ葦を折ることもなく、くすぶる燈心を消すこともない、公義を勝利に導くまでは」(20節a)
    - \*「いたんだ葦」は、霊肉ともに傷ついている者のこと。
    - \*イエスは、戦士としての王のように、その者たちを滅ぼすことはない。
  - ②「葦」は、弱いもの、揺れやすいもの、不安定なものの象徴である。
    - \*「いたんだ葦」は、霊肉ともに傷ついている者のこと。
    - \*イエスは、戦士としての王のように、その者たちを滅ぼすことはない。
  - ③「燈心」は、油がなくなるとくすぶり始め、やがて消える。
    - \*「くすぶる燈心」は、命が消えかけている者たちのこと。
    - \*イエスは、戦士としての王のように、その者たちを滅ぼすことはない。
- (3) イエスは、異邦人をも救うお方である。
- ①「彼は異邦人に公義を宣べる」(18節b)
    - \*「公義」(新共同訳では「正義」とは、真理の全貌、福音の全貌のこと。
  - ②「異邦人は彼の名に望みをかける」(21節)
    - \*異邦人の救いは、イザヤ書にすでに預言されている。
  - ③各地から異邦人が来ていることは、この預言の成就である。

## 結論：メッセージのゴール：逆転の発想

### 1. 理性中心から超理性へ

#### (1) マタ 12:18

「これぞ、わたしの選んだわたしのしもべ、わたしの心の喜ぶわたしの愛する者。わたしは彼の上にわたしの霊を置き、彼は異邦人に公義を宣べる」

- ①ここには、三位一体の神の顕現がある。
  - ②イエスがヨルダン川で洗礼を受けた時と、同じである。
- (2) 三位一体の神概念
- ①理性では把握できない。
  - ②しかし、非理性的ではなく、超理性的である。
  - ③三位一体は、救いの教理と深く関係している。
- (3) 父なる神が救いの計画を立てた。
- ①子なる神をしもべとして選び、派遣した。
  - ②聖霊なる神を、しもべの上に置いた。

- (4) 子なる神は、従順に父の計画を実行した。
- ①争うことも、叫ぶことのないのは、父に計画通りに進んでいる証拠である。
  - ②御子は、憐み深い王としての道を歩む。
- (5) 聖霊なる神は、御子を励まし、御子に力を与える。
- ①御子が人となられたのは、謙遜の極みである。
  - ②人としての御子は、聖霊の助けを必要とされた。
  - ③御子を見た者は、父を見たのである。

## 2. 広い道から狭い道へ

- (1) 一つの門が閉ざされても、別の門が開く。
- ①イエスは、パリサイ人たちからは拒否された。
  - ②しかし、イエスを慕って来る人たちの数は絶えなかった。
- (2) イエスは、すべての人に受け入れられる道ではなく、狭い道を選ばれた。
- ①私たちも、人気者になる道ではなく、狭い道を歩む者になるべきである。
  - ②自らのブランドイメージは、この世との差別化によって確立する。

## 3. 成功哲学から奉仕哲学へ

- (1) ユダヤ人たちが期待したメシア像は、ローマに対して勝利する王である。
- ①弟子たちも、同じ期待を抱いた。
- (2) イエスは確かに王として来られたが、戦いに勝利する王のイメージではない。
- ①イエスがどういう王として来られたかを理解する必要がある。
  - ②イエスは、「主のしもべ」である。
  - ③神のタイムテーブルに従って働きを進めるメシアである。
  - ④心優しい支配者である。
  - ⑤異邦人にも、救いをもたらすメシアである。
- (例話) 大阪市立桜ノ宮高校で、男子バスケ部主将の2年生男子が自殺

### (2) マタ 11 : 28~30

「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです」